

～ 学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業の取組事例 ～

郷土に想いをよせる「同窓会」（福島県 浪江町津島地区）

取組の概要

平成23年3月11日に発生した地震・津波、原発事故に伴い、被災地域の多くの子どもや保護者が県内外へと避難している。双葉郡浪江町津島地区から県内外へ避難している子どもや保護者を対象に国立那須甲子青少年自然の家において、久しぶりに会う同級生と交流を深め、郷土の良さを見つめ直すこと等を目的とし、福島大学のうつくしまふくしま未来支援センターの企画により「同窓会」を実施。

事業の内容

子ども向けプログラム...支援を受けることに慣れがちな児童生徒が自主的なプログラムの作成や参加を通じて自主性やコミュニケーション能力の育成を図る。
保護者向けプログラム...様々なストレスを抱えている保護者に対し、子どもたちの「困り感」への理解を深めさせるとともに、保護者自身のストレス解消をも図る。
全体プログラム...地域の人々と子どもや保護者が触れ合うことにより、郷土に関する情報交換や情報の共有を行う。

参加者

浪江町津島地区の小学5年生～中学2年生（震災時小学3年生～小学6年生）およびその保護者、地域住民が参加（茨城や新潟に避難している親子、福島大、企業からのボランティアも参加）

児童生徒主催事業

「自分たちのお祭りをしよう」という想いを起点とした計画・準備・発表の場での活動を通して、児童生徒の自主性等の育成を図った。



教育カウンセリング

子どもに寄り添った関わりができるよう、子どもの想いを伝えたり、保護者のストレスを軽減したり、放射線に関する情報を伝える会を実施した。



故郷の郷土芸能の紹介・体験

津島地区に伝わる「田植え踊り」「三匹獅子舞」の映像を鑑賞後、三匹獅子舞で使用する千穂づくりを体験。地域の人たちと触れ合い、郷土に関する情報交換を行った。



参加した子どもたちの感想

「なかなか会えない友達に会えてうれしい。思いっきり遊びたい。」（朝日新聞）
「今通っている学校の人たちも優しいけど、過ごした時間の長い津島の友達の方が話しやすい。いつか友達みんなと津島に帰りたい。」（朝日小学生新聞）



記事の掲載された新聞